

こんにちは！ 室長の工藤です。

前回の配信後、読者の方々から「毎回楽しみにしています」といった応援のメールを頂戴いたしました。大変嬉しく、また気持ち新たに6年目の春をスタートしたいと思います。

市民図書館内でやっております企画展示が、春の模様替えて来週木曜日から新しくなります。合浦公園・野木和公園を中心とした「青森遊覧」第2弾です。目下慌しく準備中なのですが、私が担当している公園の「沿革」はなかなか手ごわい相手です。とくに、野木和公園は、この名称はいつから？…そんな基本的なところから壁にぶつかっています。

一方、合浦公園についてはここ数年で研究がぐっと深化しているので、その成果を活用しています。ただ、私の理解が最新の研究に追いつかず、作業の手が止まることもしばしばです。そんな事例をひとつご紹介しましょう。

合浦公園は水原衛作とその実弟柿崎巳十郎の尽力によって成った公園で、それを巳十郎が青森町に寄附し現在に至っています。その「寄附」について、彼が寄附したのは衛作が所有した海手側の私有地（民有地）で、公園の核となる旧奥州街道部分は含まれていないのです。つまり、巳十郎によって公園地のすべてが町に寄附されたというのではないのです。不勉強をさらすこととなりますが、これにはちょっと驚きで改めて史料をみると、旧奥州街道部分は官有地だったことが分かりました。もちろん、すべての公園地の維持・管理は水原・柿崎が担っていました。



水原衛作・柿崎巳十郎の胸像

後に合浦公園となる公園地は、官有地と民有地とで構成されていました。そして、明治24年（1891）以降、全国的に府県管理の公園が市町村へ移管されるようになり、官有地の部分はその対象で、青森町に移管されることになったと考えられます。ですから、明治28年に巳十郎が町に私有地部分を寄附することで、公園地は一体として青森町のものとなり、その維持管理を町が行うことになったのです。これにより、水原・柿崎の公園が、町（市）の公園として整備拡大していくことになるのです。

合浦公園の歴史を記したものを読むと、ほぼすべてで公園地全体を巳十郎が寄附したかのような記述となっています。しかし、それは違うのではないかと…そんな視点が提示されているのが、現時点での到達点です。

このメールマガジンでは、こうした新しい研究成果、また私たち自身が発見した新しい歴史事実を盛り込みながら、「親しみやすい青森の歴史」を発信していこうと思っています。

これからもよろしく願いいたします。